学内研究組織成果報告（2023 年度）

無知のヴェールを用いた望ましい社会保障制度の構築
－対話型経済実験による検証－

Constructing a Desirable Social Security System Using the Veil of Ignorance
-Verification through Interactive Economic Experiments-

主任研究員名：齋藤立滋
分担研究員名：大谷剛、藤井陽一朗

日本において、高齢化の進展、医療技術の進歩などによって社会保障費は増大する傾向にあると予想される一方で、先進国中最悪の水準にある我が国の財政状況を踏まえると、社会保障費の追加的な支出の余地は限定的である。以上を踏まえると、持続可能な社会保障制度を構築することは我が国の喫緊の課題の一つであると言える。

では、どのような社会保障制度が望ましいのだろうか。近年、因果関係を明らかにする因果推論と呼ばれる実証分析の手法が一般的になっているが、それを活用した証拠に基づく政策立案(EPBM, Evidence-basedpolicy making)が注目を集めている。他方、仮に EPBM によって専門家の間でコンセンサスが得られた望ましい社会保障制度が提案されたとしても、それだけでは十分ではない。というのは、実際に社会保障制度を実行するためには、その制度の受益者と負担者である国民の納得感が不可欠だからである。すなわち、実際の社会保障制度を検討する場合、何を決めるかだけではなく、どのように決めるかが本質的に重要である。

以上のような問題意識を踏まえ、本研究組織では以下の 2 つの目標を設定した。

＊ 望ましい社会保障制度を決めるための方法論を提案すること
＊ その社会保障制度がどのように決まったかを定量的に分析すること

本研究組織では、ロールズの提唱した無知のヴェールの概念を利用し、確率的ロールプレイを用いた経済実験を実施した。その後、そこから得られた結果を利用し、被験者の選好パラメータを測定しつつその選好パラメータと社会保障制度の関係を模索した。本研究組織では、昨年度より引き続き、経済実験をおこない、2023 年度は、利得局面における経済実験を以下ように実施した。

＜経済実験＞
日時：2023 年 7 月 22 日
被験者数： 34 人

同データを基に以下の論文を作成し、学会報告をおこなった。

Fujii, Y., Ohtani, G., Osaki, Y., Shirakawa, R., and Saito, R. (2023)
Is the veil of Ignorance only a concept about risk in loss contexts?

一方、個人研究としては、近年の日本の社会保険制度の機能不全を目の当たりにし、今後の社会保険制度の持続可能性や社会保険制度の機能回復を目指した研究に取り組んでいる。具体的には、この実験経済学、行動経済学の知見を活かして、社会保険制度に対する人々の選好が性別・世代別にどのように変化しているのか、研究のサーベイを進めている。日本の社会保障制度の再構築を考えるにあたり、その柱となる社会保険制度の再構築は欠かせない。社会保険制度から漏れてしまう人々の再包摂をいかに図っていくかは、社会保障制度研究の重要な課題の一つである。

これまでの日本は、財政赤字の拡大を厭わず、国民への「受益」の分配、すなわち所得の再分配を重視してきた。しかし、21 世紀なかばの日本を考えたとき、先進国の中で最悪の水準にある日本の財政状況を考えると、財政政策での追加的な財政支出は限界にきている。今後は、所得の再分配を堅持しつつ、債務残高の減少に向けた「負担」の分配をどのように行っていくかの議論が必要になっている。しかし、所得再分配の研究は盛んに行われているが、この「負担」の分配の研究はほとんどなされていないのが現状である。

将来の日本を考えたとき、人口減少や少子高齢化の進行にともない、財政支出の増加に伴う国債残高の増加、社会保障費のさらなる増加が予想される。今後、我々の社会に求められているのは、いかに「負担」を分配するかである。我々の共同研究のように、損失局面(loss domain)における社会選好を測定することは、この「負担の分配」を人々がどの程度まで許容できるのかを議論する際に非常に重要である。